

色彩の扉を開ける

奥 美佐子

色彩の第一の扉は「出会い」の扉

パス・マーカー・コンテ・絵の具等、子どもの描画に適した描画材の種類は多様にあります。保育・教育の現場で子どもたちが最初に出会う描画材がパスであることが多く、0歳児から小学校の低学年までの描画にはパスがよく使われています。新しいパスの箱を開ける時のドキドキワクワクした心の高鳴りはいったい何でしょうか。開いたときに漂う蠟と油脂の独特の香りとともに、眼に飛び込む色彩のグラデーションの美しいこと。子ども時代の驚きは大人になった今も少しも変わらないのです。パスの箱を落として床にばらまいてしまった子どもが、1本1本拾って元と同じ美しい色の並びになるよう、懸命にパスの並びを整えている姿に納得し共感するものがあります。

第二の扉は「育ち」の扉

描画の発達過程から見ると、0～2歳児の子どもたちはまだスクリブルを楽しんでいる時期でもありますが、3歳以上になるとものの形が少しずつ出現してきます。スクリブルの時期には目前にある色や目についた色、好きな色で描くことが多く、人や物の形を生み出そうとしている時は単色で描く子どもが多いと思われます。その後徐々に自分の好きな色やそのものの固有色に近い色で表現しようとし、個人差はありますが色の選択方法も変化するのです。第二の扉は、特に大人が理解しておきたい扉です。

第三の扉は「発見と試行」の扉

赤・青・黄は色の三原色で、色相環にある色は三原色の混色でつくることが可能です。レオ・レオーニ作「あおくんときいろちゃん」は既知の絵本ですが、あおくんときいろちゃんが重なるとみどりになり、その変化に興味を惹かれます。子どもたちは色水遊びや、パレットの中や画用紙の上で、青と黄が混ざって緑になることや、赤と青が交差したところが紫になることを偶然発見することがあります。次に赤と黄を混ぜたら何色になるのか、緑と青は？ 赤と緑は？と次の試行に挑みます。偶然の発見から興味を持ち、試行へ。興味を持って試す行為が主体的な表現活動を誘います。

最後の扉は「イメージと創造性」の扉

最後に子どもたちは、豊かな色彩のイメージと創造性の扉を開き、自分なりの表現を獲得するでしょう。

『ポンちゃん、にじをかく』には開けたいすべての扉が備わっています。作者である谷口真実子さんとは防災絵本『まもるんといもごん』の監修をお引き受けしたときに、出会いの扉が開かれました。脚本家であり、ダンス講師、役者でもある多才な作者が生み出したストーリーは、パスと出会い、虹の7色の混色で試行錯誤し、最後にイメージした虹を描くポンちゃんの活動のプロセスを通じて、絵本を読んだ子どもたちに創造活動の喜びと達成感を与えてくれることでしょう。

ポンちゃんはクレパス王国へ赤・青・黄の三原色のパスから虹の7色をつくる旅に出かけます。虹の色数や色名は国によって3～7色と異なるといわれています。日本では7色が通常のもので、『ポンちゃん、にじをかく』ではパスの赤・青・黄三色から混色してつくることができる7色の色相で、赤・橙・黄・緑・青・青紫・紫と表記しています。『ポンちゃん、にじをかく』を読みながら、または保護者の方や先生に読んでもらいながら、パスの3色を混色して実際に虹を空に浮かべてみましょう。第一の扉を開けると、きっと「発見と試行」の扉、「イメージと創造性」の扉が開かれるでしょう。

神戸松蔭女子学院大学 人間科学部 子ども発達学科教授
専門分野は美術教育学。研究領域は子どもの造形活動。